

クリスタ・ヴォルフ『カッサンドラ』論考

——カッサンドラはなぜアイネイアスについていかなかったのか？——

人文学部人間文化課程

欧米文化コース ドイツ文芸ゼミナール所属

08H1026 小野菜摘

本論考は、現代ドイツの女性作家クリスタ・ヴォルフ（1929— ）の小説『カッサンドラ』（1983年）を取り扱い、その結末で主人公カッサンドラはなぜ恋人アイネイアスについていかなかったのか、という問いを軸に、この作品においてヴォルフがなにを伝えようとしたのかを考察することを主たる目的とした。

『カッサンドラ』はギリシャ神話におけるトロイア戦争を題材としており、ギリシャ軍とトロイア軍とが戦ったこの戦争を、トロイアの王女カッサンドラの視点から描写している。同じトロイア戦争を扱ったホメロスの『イリアス』が、おもに戦勝国ギリシャの英雄アキレウスの視点から、男たちの戦いを賛美しつつ描写していると考え、『カッサンドラ』はその対極に位置していると言っている。なぜなら『カッサンドラ』では、敗戦国の女であるカッサンドラが、トロイア戦争のただなかにいる男たちについて批判しつつ語るからだ。その意味では、『カッサンドラ』は『イリアス』の反テキストとも考えることができる。

論文の第1章ではまず、ヴォルフの生涯とこの作品の執筆の経緯を概観した。そのなかで、ヨーロッパの歴史の考察を通じ、ヴォルフがそこに女性が客体化されてきた（ものとして扱われてきた）という歴史を読み取っていたことを指摘した。また、小説の結末部を引用しながら、本論考で扱う「カッサンドラはなぜアイネイアスについていかなかったのか」という問いを提起した。

この作品におけるアイネイアスはカッサンドラの恋人という設定で、陥落寸前のトロイアを脱出したのち、ローマを建国することになる人物である。物語の結末でアイネイアスは、カッサンドラに自分について来るように勧める。しかし彼女は「わたしたちは英雄を必要とする時代には歯が立たない」と主張し、さらに「英雄を愛することはできない」という理由で彼の提案を拒絶する。そして、彼女にとってアイネイアスを拒絶することは、「自分と相容れないある役割」を拒絶することでもあった。

第1章で立てた問いから、筆者は考察すべき3点の課題を導き出した。カッサンドラと「相容れない」役割とは何か、「英雄になる」とはどういうことか、「英雄を必要とする時代」とはどういう時代か、という疑問である。以下、第2章、第3章、第4章では、これらの問いについて逐一検討した。

第2章では、カッサンドラと「相容れない」役割を考察するため、まず第1節においてカッサンドラ自身の性質を規定しようと試みた。その際、ヴォルフ自身の生涯と作品中の

カッサンドラ像を重ね合わせる作業が必要となった。ヴォルフは作品執筆にあたり、アイスキュロスの『アガメムノーン』に登場するカッサンドラをモデルとしている。ギリシャ神話の人物カッサンドラは、アポロンに身を任せる約束をし、予見の才を与えられる。しかし直前で翻意したために、予言を誰にも信じてもらえないという呪いを受けることになった。ただ予見の才の獲得に関して異なっているのは、『アガメムノーン』のカッサンドラが予見の才を「与えられた」ニュアンスが色濃いのに対し、ヴォルフが描いたカッサンドラはより主体的に「熱望した」という点である。トロイアの宮廷では、ヴォルフが考察したヨーロッパにおける原始母権制社会から父権制社会への移行、それと全く同じことがまさに起ころうとしていた。カッサンドラにとって「語ること」は、それに対抗する唯一の手段であった。ちょうど旧東ドイツに生きたヴォルフが、「書くこと」でドイツ社会主義統一党に対抗したように。このようにヴォルフはカッサンドラを、男に「もの」として扱われる女の辛さを経験しながらも、「語ること」でそれに抗い、主体として生きようとした人物として描いている。

続く第2節において、カッサンドラが「相容れない」と感じていた妹ポリュクセネと、トロイア軍に味方したアマゾン族の女王ペンテシレイアの、2人の性質を検討・規定した。

ポリュクセネは、人を惹きつけてやまない美しさを備えていた。この美しさのために、あらゆる人がポリュクセネに働きかけたが、彼女のほうから働きかけることはなかった。つまり、ポリュクセネはこれまでの人生において、主体である必要がなかったのである。彼女は極端に「客体」なのであり、しかも客体であることを喜んで受け入れた。そして、自分自身を墮落させる、すなわち自己犠牲という手段によって、変わりゆく宮廷に抵抗した。

反対に、ペンテシレイアは相手を排除するというやり方、つまり男と同じように「闘う」という手段で主体になろうとした。アマゾン族には女しかいない。彼女たちは、近隣の集落に住む男性とのあいだに子をなした後、その男を殺してしまう。男がいないなら、女が戦うしかない。戦うために、弓を引く邪魔になる片方の乳房を切り落とすという。奴隷にされるより、戦って死ぬほうを選ぶのだ。アマゾン族はそうすることで、「戦う女」として生きてきた。だが、彼女たちアマゾン族の抵抗手段は、宮廷で、女を排除しようとしている男たち（エウメロスら王党派）とまさに同じなのである。

ポリュクセネとペンテシレイアの特徴を整理するならば、前者は極端な受動性・客体、後者は極端な能動性・（むしろ男が現在進行形で享受している主体と同一の）主体である。そして、語ることを抵抗の手段としているカッサンドラとは違って、ポリュクセネは自己犠牲、ペンテシレイアは闘うことを抵抗の手段としてきた。このことから、主体を獲得しようとして生きてきたカッサンドラは、「語らない女」という役割を拒絶したのだと結論づけた。これが、カッサンドラと「相容れない」役割とは何かという第2章の問いに対する、自分なりの答えとなった。

第3章では、「英雄になる」とはどういうことかを考察した。カッサンドラは「英雄を愛

することはできない」と言ったが、彼女は恋人が「英雄」になることをなぜ望まないのだろうか。カッサンドラは「英雄」を否定的なイメージで捉えていたに違いない。

第1節では作中の「英雄」（と思われている存在）を取り上げ、彼らの共通点ないし特徴を探った。取り上げた人物は、トロイア王プリアモス、ギリシャの英雄アキレウス、王党派のリーダー・エウメロスの3人の男たちである。プリアモスは、自分に従わない娘カッサンドラに対し、監禁したり、政略結婚を強いたりした。アキレウスは、神官の娘ブリセイスを女奴隷にし、ペンテシレイアの亡骸を凌辱し、ポリュクセネを所有しようとし、かつ自らの墓前で殺させた。エウメロスは、カッサンドラや王妃ヘカベーを元老会議から追放したり、ポリュクセネをアキレウス暗殺の囮に利用したりした。

第2節では、考察の結果、彼らいずれの人物にもカッサンドラをはじめとする女たちを「もの」として扱った、という共通性が見られた。このことから、「英雄になる」とは比喻であり、「父権制社会に生きる」ということであるという結論に至った。父権制社会においてなら、男（たち）は主体のままでいられる。アイネイアスがこれから建設することになるローマも、ヴォルフの考察によれば、いずれ父権制社会を形成するようになる。すなわちアイネイアスが父権制社会に生きるのは避けられないのである。

第4章では、「英雄を必要とする時代」について考察した。カッサンドラは、回想の中でトロイアに「新しい時代」が訪れたとして、さらにその時代にはエウメロスという名前がついていたと振りかえる。筆者はこの「新しい時代」と「英雄を必要とする時代」が同一のものであると考えた。

第1節では、エウメロスが具体的にトロイアに及ぼした影響について検討した。エウメロスによって宮廷は秩序を失っていった。また予言者などの一部の例外を除き、トロイア人全体が「盲目」になってしまった。ここでいう「盲目」とは、自分自身を見ない、すなわち自分を客観視できなくなってしまった状態のことである。カッサンドラは予見の才を得たことで未来に起こることがわかるようになったのだが、この予見能力を「ものごとを客観的に見つけ判断する能力」と押し広げて考えることもできる。この解釈に従えば、自分自身さえも客観的に見ることができるといえる。すなわちカッサンドラだけが、盲目ではなく「見える」人なのだ。カッサンドラは蟻の比喻を用いて、盲目の民族の生き残りが、新たな民族の中核となるのだと考えた。それはこの「数少ない生き残り」がずっと主体であり続けるためであり、この「数少ない生き残り」こそ、のちの「英雄」なのだ。戦争の勝利者は、殺される（客体）ことも捕虜になる（客体）こともない。そうやって生き残り続けることができれば、その者はさらに主体であり続けられる。第1節をまとめた結果、「英雄を必要とする時代」とは、英雄たちが主体であり続けようとして、国の興亡がくり返される時代のことであるという結論に至った。

第2節では、カッサンドラのいう「英雄を必要とする時代」に歯が立たない「わたしたち」とは誰を指すのかを考察した。結末部において、カッサンドラはわざわざ「わたし」ではなく、「わたしたち」と言っている。戦争によってあいまいに、希薄になっていく「わ

たし」と「わたしたち」を定義するためには、カッサンドラがどのような世界に属しているのかを考える必要があった。カッサンドラには、王の娘としての宮廷、女神官としての神殿、自由な女としてのイデ山という3つの世界があった。彼女はこれら3つの世界のあいだでしばらく揺れ動いていたが、カッサンドラが最後にたどりついた世界は、イデ山の世界であった。これでカッサンドラは、「わたし」と「わたしたち」という両方の言葉を獲得した。だがギリシャ人の計略の前にトロイアは陥落し、それと同時にイデ山の世界も失われた。カッサンドラにとっての「わたしたち」とは、身分を越えてイデ山でともに暮らした人びとであった。

以上の内容を整理すると、本論考の主旨は以下のようにまとめることができるだろう。カッサンドラはなぜアイネイアスについていかなかったのか？——それは、カッサンドラは原始母権制社会に安らぎを見いだしたのに対し、アイネイアスが将来的に、父権制社会に生きることを予感したからである。男たちが主体であり続けようとする国の興亡をくり返す時代には、女たちは歯が立たないのであり、だからこそ彼女はアイネイアスを拒絶することで、「語る女」という役割を獲得できたのだといえる。そしてそれは、終焉を迎えようとしていた東ドイツという国家の、ますます硬直化し閉塞した社会状況の中であって、主体であり続けようとする作家ヴォルフ自身がまさしく選び取った役割でもあった。

クリスタ・ヴォルフ（中込啓子訳）『カッサンドラ』、『池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集 II-02 失踪者／カッサンドラ』（2009）河出書房新社 所収

Christa Wolf : *Kassandra*, Darmstadt und Neuwied, Hermann Luchterhand Verlag 1983